
ニーナのEvery day

瑠紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニーナのEvery day

【Nコード】

N3094D

【作者名】

瑠紀

【あらすじ】

私は帰国子女の刈谷崎ニーナ。母はイギリス人父は日本人。親なしとなったニーナの前に彩崎グループの御曹司秦が現れた！！そして養子になるニーナ。もちろん、ぼーっとしてて入れるはずもなく・

ブローグ 秦とNina。

世界は、私を嫌っている。

私の存在を忘れている。

神なんか信じない。

神がもしいるのだとしたら、、

「Eli, Eli, lama sabachthani? Has my existence been forgotten?」

思わずつぶやいてしまった。

私は帰国子女で、独り言などは英語になる。

目の前には、母と父の寝ている・・・姿がある。

いつ、目を覚ましてくれるのか。

黒い服の人たちは泣かず、ただ、「こんな厄介な子を残して・・・

誰が引き取るの?」といていた。

私は誰に引き取られようがかまわない。

ただ、最愛の両親を神に奪われて悲しんでいた。

だが、不思議と涙はこぼれなかった。

私は、すぐ教会の裏庭に行った。

日本語で最近歌う事が多くなったなと思いながら

e . . . eli . . . The god betrayed m

Why is it me?

What did I do?

Or, is this a dream?

If it is a dream, I want you to
wake up early.

Such a nightmare

It is unnecessary.

Mischievous of god

It is not possible to permit
even in case of the god.

I ready only have to disappear.

The particular world

Ruin.

私は頭の中で思いついたことを歌った。

「いい声だけど、歌ってる内容は怖いね。」

よく、そんな事を言われた。

「声きれいだね。ねえ、僕のお父さんが君を引き取りたいそうだけ
ど。」

目の前には美しい少年がいた。

「引き取る？ああ、養子のこと。分かりました。」

「よかった。他の人は君の事を酷く扱おうとしてたみたいだし」
余計な事を言う人だな・それが私の第一印象。

「貴方の事はなんて呼べばいい？」
名前を知らないから。

「僕は、彩崎^{あやさき} 秦^{しん}。しんって呼んで。」

あやさき・・・

「アハ 分かった？彩崎グループの御曹司ね、僕。」
まじで？あたし、そんな所の養子になるって大丈夫なわけ？

「あたしは、刈谷崎^{かりやさき}二ーナ。母がイギリス人だからしたの名前はN
ina

だけど。」

よく、「なんで二ーナ？」って聞かれるから先に言った。

「刈谷崎じゃなくてもう彩崎ね！！よろしく。」

そういいながら笑みをうかべ手を差し出してきた。握手だろう
母と父が死んだことも一瞬忘れかけるほどまぶしい、純粋な笑顔だ
った。

「よろしく」

そう手を握り返した。

ブローグ 秦とNina。(後書き)

瑠璃です。

ちよつとシリアスを書いてみたくって書きました。

英語はちよつと自信あるんですけど、間違ってたら教えてください
ねw

二丁ナの歌の意味。秦。

e l i . . . e l i . . . 神は私を裏切った。

なぜ私なんだ？

私は何かしたか？

それともこれは夢？

それが夢であるなら、私は、早く目覚めて欲しい。

こんな悪夢

いらない。

神の悪戯。

神だとしても許さない。

消えてしまえばいい。

こんな世界

滅びろ。

彼女は、そんな事を歌っていた。

そういえば、彼女の家系はややこしい。

今、死んだ母親や父親は彼女の本当の両親じゃない。

彼女は3歳のころ両親が死に、今の両親の所へついた。

両親達は実の娘のように、可愛がってくれたらしい。

彼女にとって、実の親と何の代わりもない存在だったのだ。

彼女にとって、この両親はなくてはならない存在だったのだ。

ニーナは何を望む。

俺の家に来て、不幸は取り払えるのか？

いや、無理だろう。

彼女が必要としているのは愛。

俺の家には愛のAもない。

俺の家は金はあるが親が金の事しか考えていない。

俺は親が嫌いだ。

あの親は子供が目に映っていない。

子供は操り人形。

そっという人間だ。

ニーナが穢れる事がないように。

俺が見守ろう。

そう決めた。

ニーナが傷ついても、俺には結局どうしようもないが。

ニーナ・・・なぜお前は心を閉ざす・・・

This hard decision この悲しい決断

It permits . 許して欲しい。

シリアスから少し開放。ニーナの課題。

今の私に

Am I unhappy? 私は不幸？

Or, is it lucky? それとも幸運なのか。

About what you think. 貴方は一体何を考
えている。

Is it happy? 楽しいか？

It is happy what. それで満足か？

Us... Do not roll it. 俺達を巻き込む
な。

I am unrelated to anything. 俺は
関係ない。

神がいたとすれば、

The god is a satan. 神は悪魔。

The satan is Ototenshi... 悪魔は堕
天使だろう。

幸運をもたらしたのは自分。

信じられるのも自分。

結局、なにも信じれてない。

信じてもいいのか？

ぴつたりな歌

「ねえ、こないださ、e l i / e l i っていったよね？何語？」

秦が私の部屋に入ってきた。

一通り勉強は終わり、復習、予習、自分が興味のある勉強をする前に歌っていた。

なぜ、わたしがこんなに勉強をしているかというと、

秦が彩崎グループをつぐときに、私を秘書にしたいそうだ。

「分からない。確かポーランド語だと思う。」

なんか、ある男が死刑の間に、こう叫んだという。

「E l i / E l i / l a m a s a b a c h t h a n i ?」

「そう！！それぞれ。なんていう意味？」

――神よ神よ。なぜ私をお見捨てになりましたか？――

「・・・それより、何の用？」

ただ、これを聞きに来ただけじゃあるまい。

「うん。こないだ、両親が死んだのに俺、君の気も考えず、喋っちやったから。」

いがいと、そういうところはまじめか。

「気にしてないから。」

本当の気持ちだ。そういう人はたくさんいたから慣れている。

「違うよ！！俺が大人達とは違うと思われたいの。」

ガキかコイツ。こんな事にこだわるなんて。しかも僕から俺になつてるし。

「ん？初対面の人には礼儀正しく！ってね」

なるほど。しかしコイツのテンションは高いな。

「ねえ、俺とイタリア語で会話しよ!!」

はあ? あたしイギリスからの帰国子女なんだけど。

「イタリア語分かるんだろ?」

そっついながら秦は私の机の上にあるイタリア語の文学書を指で指した。

ああ、なるほど。・・・片付けて大切だな。

「Facciamo presto」

ああ、はじまつちゃったか。

「めんどくさい。イタリア語とかマスターしてないし。英語ならイケド。」

英語なら日本語で会話するより簡単だし。

「え、それニーナのほうが有利だし。」

駄々こねてる。肝!!

「お前はガキかよ。あたしは今忙しいし。駄々こねるんだったらやんないよ?」

ぴたっと止まった。

「うっ、Nina・・・Is it cruel？」

「I am not cruel.
It is an angel.」

「うわ！！自分で残酷じゃないって言った上に天使って！ニナ自己意識過剰??」

うるせー

「黙れ。会話終了。さっさとでていきな。」

あたしが秦をトビラまで押したら

「Do not get a cold.」

なぐんてキザな言葉を残して出て行きやがった。

・・・風邪なんてひかねえよ。

態と秦が机に忘れていったもの。

「風邪に注意」

と書かれたのど飴だった。

ドンだけ心配性だよ。

まあ、いちよう

「・・・ありがとな」

・・・もう本人いないけど フフ

秦視点。バンド。

ニーナが、笑った。

俺が

「Do not get a cold .
くなよ」

風邪をひ

って言ったら少し微笑んだ。

ニーナ美人だし、笑ったらちょー可愛い。

あの飴なめてくれるかな？なんて考えてたら、

「よー！秦。バンド活動今からな」

と、陸が言いにくた。

つか、俺の邸に勝手に入ってきてるし。

「へいへい。」

陸にテキトーに返事を返した。

「あ、そーいや歌詞考えられたかよ？」

ああ、歌詞か・・・

「ま、いちよーな」

そーいって歌詞を渡した。

たぶん没かな・・・

「おい」

ほら・・・

「この英語なんて読む？」

は？・・・あり得ねー中2にもなつてわかんねーとか。

「おい！！英才教育を受けたお前と俺を一緒にすんなよ。」

いや、学校でもならったし。

「俺、英語の時間になると寝ちやうんだよなー」

ああ、なるほど。そーいえば、コイツの英テスト15点だったつけ。

「おい、なに笑ってたんだよ。」

「いやついつい」

英語の歌詞か

意味は――

タイヨウの篤い光を受けてやさしさに包まれた気がした。

何を驚く。

何が楽しい。

そんな感情どつかへいつちまった。

一時期の愛情はいらねえから。

明日晴れたらとは考えず、明日雨だったらとしか考えられねえ俺の頭。

・思考で何が悪い？

そんな頭にしたのはテメえだろ？

「――みたいな。」

「・・・あのさ。お前、なんか悩み抱えてんのか？」
陸なりの心遣い――

「・・・いろいろとな」
「こんな言葉しか出ない。」

「まあ、何かあったら相談しろよ。この歌詞は、合格な。」

「つぶ。合格って何だよ」

「まあ、いいじゃねーか。お前んちの防音室でやろうぜ。」
俺んちには3つの防音室がある。

「いいけど？」

おっしとでもいうようにガッツポーズをしていた。

あ、ニーナ忘れてた。

どうしよう・・・

「おい！！皆あと5分で来るってさ。」

5分って・・・

「お前絶対『あと5分でこねえーとぶっ殺すぞ！！』とかいって脅しただろ。」

メールだったから声は聞こえなかったけどなんとなく分かる。

「あ、ばれた？さすがだな　ハハ」

まあ、ニーナのことどーせいつかばれるし、大丈夫だろ・・・

秦視点。バンド。（後書き）

次話で秦の考えた歌詞、英語版を書きます。
よろしく

陸とニーナ。

「Light with easy sun was received and I... easiness... thought that I was encompassee.

surprised

is happy?

The feelings do not exist.

Love at the moment is unnecessary.

I thought rain tomorrow.

I of minus idea. Is it bad?

It is you that did in this way.

ふう、と俺はゆっくり息を吐く。

今は第2番の防音室。

第1番はニーナが使ってた。

そして今、曲を歌い終わった所。

これはずいぶんロックになったな。

そんな事を考えてたら、ニーナが入ってきた。

「ちょ『このかわいいコ誰！！？秦の彼女？』」

ニーナが途中で会話に入られたのが気に入らなかったのか、頬を心なしか膨らませている。

「ちげーよ。んー年は変わんないけど妹？かな。」

俺は誕生日が1月3日でニーナは2月16日。

「・・・それより、今の歌秦の歌でしょ？」

ニーナがまだふてくされてるのか、低い声を出した。

「うん。どうだった？意外とうまかったでしょ？」

へへっちょつと自信あんだー

「・・・いつちゃ悪いけど下手。音程が少しおかしいし、英語の発音がなってない。・・・なにより感情がこもってないね。」

・・・

啞然とするばかり。

ニーナってここまで口が辛かった？

「・・・ねえ君。じゃあ、そんなに言うなら君が歌ってよ。」

陸がイラついたようにいう。

やばい！！陸がきたらだれかれかまわず殴る。（挑発した相手を）

「ちょ、落ち『嫌だね。誰かの前で歌うの好きじゃない。それに・・・』」

ニーナは周りをぐるっと見回した。

「あんたたちみたいなのがいるところで歌うのは無理。」

時が止まったかと思った。

しかし、この沈黙を破ったのは、

陸だった。

「テンメえ、女だからってなめやがって、女の癖に。女だからって
よーしゃしねーぞ！！！！」

陸がついにきれた

「おい！！」

俺はそういつて陸を止めようかと思ったけど、皆に止められた。
この中に入っていけばお前も殺られるぞ。

そうみんなの目が言ってた

口には出してないけど。

陸がニーナの胸倉をつかんだ。

しかし、ニーナは動じない。

「女、女、うるせーんだよ。・・・あんたの口とその手は暴言を
吐いたり、殴ったりするためにあるの？もしそうだったら、・・・」

・
」

ニーナがため息をついた。

その瞬間、いつもの冷たいオーラがなくなり、どす黒いオーラが見
えた。否、見えた気がした。

「あたしがあんたをつぶす。」

ニーナはいつも、厳しい、冷たい口調だけど、こんな言葉聞いた事
がない。

陸がついに殴りかかった。

胸倉をつかまれているからよける事は無理・・・

一瞬の出来事だった。

ニーナがすばやく胸倉をつかんでる陸の手をぐねり、もう一つの手で殴りかかってきた手を受け止め、すばやくぐ練らした。

この技、見たことある。

少林寺かなんかだったと思う。

「……あたしをつぶすのは誰にも出来ないよ。」

ニーナが厳しい、冷たい、肉の味を覚えた熊を哀れむようにみた女神のように、言い放った。

ニーナの謎が、また増えた。

陸と二丁ナ。(後書き)

ちよつと表現がおかしいと思いますが、次話で解けると思っています。
ヨロです、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3094d/>

ニーナのEvery day

2010年10月22日00時04分発行